

第21回JCA中国四国支部大会

2018.11.24.

文科省・文化庁における 「コミュニケーション(能力)」観の変遷

脇 忠幸

福山大学 人間文化学部 人間文化学科

問題の所在

近年・・・

社会のいたるところで「コミュニケーション能力」が重視されている。

しかし・・・

当該「能力」の定義は不透明。

～「胡散臭い」（平田2012）

その不透明さを起因とした不安と期待（圧力）

問題の所在

小山（2015）は近年のコミュニケーション教育の問題として・・・

- 1) 「コミュニケーション能力」の様々な定義やその差異が学生（受講者）に対して必ずしも体系的に明示されていない。
- 2) 受講者や社会からの「コミュカ」教育への過度の期待が非体系的つまりその場しのぎ的）に反映されている
- 3) 「コミュカ」型教育が必ずしも期待されるような結果に結びついていない。

問題の所在

発表者もこれまでいくつか・・・（脇2016,2017,2018）

「コミュニケーション能力」とは何であって、何でないのか？

【行政】→現行の学習指導要領（一部改正版）

【企業】→経団連「2015年度 新卒採用に関するアンケート調査」

→そのほか、企業を対象とした調査

【学術】→学術論文

【一般】→朝日新聞の「声」欄（2年分：2015～2017年）

問題の所在

発表者もこれまでいくつか・・・（脇2016,2017,2018）

「コミュニケーション能力」とは何であって、何でないのか？

+「コミュ障」とは？？

twitter上の言説

「コミュ力」= 50ツイート

「コミュ障」= 50ツイート

結局、よくわからない。

構成要素として挙げられるものは、特殊な能力ではない。

全て実践できる人＝スーパーマン！

教育や訓練次第で向上／低下

議論の前提

「コミュニケーション能力」低下という認識

本発表の目的

「コミュニケーション能力」低下という認識

「コミュニケーション能力」偏重（期待と圧力）

⇒なぜ、どのように、形成されたのか？

今回は・・・

国語審議会・文化審議会（国語分科会）の報告に見られる「コミュニケーション（能力）」観とその変遷を分析する。

方法

分析の対象とする資料は以下の4つ

文部科学省.2000.『現代社会における敬意表現』(全22頁)

文化審議会.2004.『これからの時代に求められる国語力について』(全42頁)

文化審議会.2007.『敬語の指針』(全82頁)

文化審議会.2018.『分かり合うための言語コミュニケーション』(全79頁)

⇒「コミュニケーション」「コミュニケーション能力」を検索。

⇒それぞれどのように語られているか。その変遷も。

文部科学省.2000. 『現代社会における敬意表現』

◎「コミュニケーション」= 31件、「コミュニケーション能力」= 0件

● コミュニケーション = 情報、考え、気持ちを伝え合うこと

● 社会はコミュニケーションで成り立っている

— 社会生活は人と人とのコミュニケーションによって成り立っている。コミュニケーションとは我々が伝えたい情報や、自分自身の考え、気持ちをお互いに伝え合うことである。コミュニケーションを円滑に行うこと、すなわち話し手が伝えたいことを摩擦を起こさずに確実に相手に伝えることによって、社会の中で自分を生かし、安定した社会生活を送ることが可能となる。(三-1)

文部科学省.2000. 『現代社会における敬意表現』

- コミュニケーション = 情報、考え、気持ちを伝え合うこと
- 社会はコミュニケーションで成り立っている

— 社会生活は人と人とのコミュニケーションによって成り立っている。コミュニケーションとは我々が伝えたい情報や、自分自身の考え、気持ちをお互いに伝え合うことである。コミュニケーションを円滑に行うこと、すなわち話し手が伝えたいことを摩擦を起こさずに確実に相手に伝えることによって、社会の中で自分を生かし、安定した社会生活を送ることが可能となる。(三-1)

- 強調される「円滑」なコミュニケーション

文部科学省.2000. 『現代社会における敬意表現』

● 強調される「円滑」なコミュニケーション = 敬意表現（相手への配慮）

— 自分自身の考えを言葉で確実に伝えつつ、相手や場面への配慮を示す敬意表現を使うことによって、**円滑なコミュニケーション**が可能となる。我々は敬意表現によって、**人間関係や社会生活をより円滑にすることができる**のである。(三-1)

● 「円滑」を阻害する社会変化（多様化）。解決方法としての教育。

— 国際化、地域社会の変容、言葉の「ゆれ」、ケータイ、漫画、テレビ、ゲーム

文部科学省.2000. 『現代社会における敬意表現』

● 多様化 = 新しいメディアへの警戒

— 相手と直接向かい合って行う対話や声の聞こえる電話と異なって、**相手からその都度の反応を受けながらコミュニケーションを進めることができない**という制約(四-6)

— 様々な関係の相手に向けて同じ言語表現による伝達を一律に行ってしまうことによって、それぞれの相手への配慮を**きめ細かくは表現できない**場合のある(四-6)



● 変容するコミュニケーションへの警戒

— **適正な言葉遣い**を考えるその基盤には、**国語を愛し、大切に**する精神がなければならない。

文化審議会.2004.

『これからの時代に求められる国語力について』

文化審議会.2004.

『これからの時代に求められる国語力について』

◎「コミュニケーション」= 30件、「コミュニケーション能力」= 6件

● 社会生活の基本であるコミュニケーションは国語によって成立する

● コミュニケーション = 相手を尊重する態度と伝え合い

— コミュニケーションの基本は、相手の人格や考え方を尊重する態度と言葉による伝え合いであり、国語の運用能力がその根幹となっている。(p.3)

— 国語なくしては、社会は成立せず、その発展も望めない。(p.3)

● 阻害要因としての社会変化（多様化）

— 国際化、情報化、地域社会の変容

文化審議会.2004. 『これからの時代に求められる国語力について』

- 「コミュニケーション能力」の“登場”
- コミュニケーション能力 = 国語の力（読書の称揚）

≡「人間関係形成能力」「効果的に発表・掲示する能力」

一言によって多様な人間関係を構築することのできる「人間関係形成能力」や目的と場に応じて「効果的に発表・提示する能力」は、現在の社会生活の中で強く求められている能力の一つであるが、**これらの根幹にあるのもコミュニケーション能力であり、国語の力である。(p.3)**

文化審議会.2004.

『これからの時代に求められる国語力について』

● 様々な「低下」現象の原因としてのコミュニケーション。その解決方法としての教育（＝国語教育）。

—いじめや不登校、家庭内暴力、少年非行などの子供をめぐる諸問題についても、子供同士、子供と教員、子供と親、子供と大人などの間で言葉を介しての意思疎通や、日常的なコミュニケーションが十分にできなくなっていることが、一つの原因ではないかと指摘する声もある。(p.4)

—少子高齢化や核家族化に伴って家庭や家族の在り方が変容し、従来、家庭や家族が有していた子供たちへの言語教育力が低下していると言われていたことも大きな問題である。(p.5)

—近年の日本社会に見られる人心などの荒廃が、人間として持つべき感性・情緒を理解する力、すなわち、情緒力の欠如に起因する部分が大いと考えられることも問題である。(p.5)

文化審議会.2004. 『これからの時代に求められる国語力について』

- コミュニケーション能力 = 学校&家庭&地域社会の教育が重要
- コミュニケーション能力と脳科学（先天的な要素）

—最近の脳科学の研究成果によれば、コミュニケーションを行う際に活性化する脳の場所は国語力とかかわる部分でもあることが判明している。このことから、コミュニケーション能力を鍛えることで、国語力を支える脳の部分も鍛えられることになると考えられる。(p.13)

—乳幼児の脳の発達に最も重要なのは、親子のコミュニケーションである。(p.13)

—家庭や地域においては、まずコミュニケーションを増やす努力が大切である。そのことが、子供たちの国語力を育てることに直結すると考えられる。(p.18)

文化審議会(文化庁).2007.
『敬語の指針』

文化審議会(文化庁).2007. 『敬語の指針』

◎「コミュニケーション」= 18件、「コミュニケーション能力」= 0件

●コミュニケーション = 具体的な場で人と人との間で行われる

●円滑なコミュニケーション = 敬語が重要かつ必要 = 相互尊重

一言語コミュニケーションは、話し言葉であれ書き言葉であれ、いつも具体的な場で人と人との間で行われる。そして敬語は人と人との間の関係を表現するものである。注意深く言えば、意図するか否かにかかわらず表現してしまうものである。そうであるからには、社会生活や人間関係の多様化が深まる日本語社会において、人と人が言語コミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために、現在も、また将来にわたっても敬語の重要性は変わらないと認識することが必要である。(p.6)

文化審議会(文化庁).2007. 『敬語の指針』

● 阻害要因としての社会変化（多様化）

—情報化、地域社会の変容

—ファクシミリや電子メールでは文章自体を要点だけの短いものにすると同時に、敬語も割愛してしまうといった傾向への批判や注意喚起である。あるいは、新しい媒体は、一人対一人の伝達と同じような手軽さで、一人から多人数に向けて同時に通信することも可能にしているが、その場合に、多人数に向けた通信であることに対する自覚に欠けた画一的な言語表現や敬語使用をしがちであることへの批判や注意喚起である。(p.10)

—現代社会における言語コミュニケーションは、多様で複雑な人間関係の中で営まれる度合いをますます強めている。(p.54)

文化審議会(文化庁).2007. 『敬語の指針』

- 問題解決方法としての教育（国語教育と総合的な時間）
- 学校教育による「体験」の提供

—学校教育で行われる敬語の学習・指導は今後とも継続していく必要がある。例えば、国語科において敬語の基本についての知識を扱うと同時に、様々な人間関係や多様なコミュニケーションの場が体験できる総合的な学習の時間や種々の校内活動の機会等を活用して、敬語の実践的な使用についての学習・指導を行うなど、これまでに蓄積された工夫を一層充実させることが課題となろう。(p.11)

文化審議会.2018.
『分かり合うための言語コミュニケーション』

文化審議会.2018.

『分かり合うための言語コミュニケーション』

◎「コミュニケーション」151件（目次除く）、うち「言語コミュニケーション」49件（目次除く）

◎「コミュニケーション能力」9件

●コミュニケーション = 受け止め合うこと(受け手の重要性)

—送受の立場は固定されたものではない。役割を切り替えながら、共通の理解を目指していく。(p.4)

—やり取りがうまくいくかどうかを左右するのは送り手であると考えられがちだが、**受け手の役割と責任も同じように大きい**。(p.5)

文化審議会.2018.

『分かり合うための言語コミュニケーション』

- コミュニケーション = 手段や媒体が多様化 (打ち言葉)
- 情報化社会への警戒(濃密化と広範囲化)

—インターネット上には、SNSなどの広がりによって、ごく親しい人との個人的で極めて頻繁なやり取りと、顔も名前も知らないような不特定の人々を対象とした広範囲で匿名性の高いやり取りという、対照的なコミュニケーションが共存している。やり取りの場や用いる媒体の特性を十分に理解あるいは意識していないことによって、個人情報が多くさらされたり、予想外の事件や反社会的行為に巻き込まれたり、負担してしまったりする場合さえある。(p.10)

—膨大な情報に常時さらされている私たちは、それらの言葉一つ一つについて、意味を深く考えたり、味わったりすることに難しさを覚える状態にあると言える。(p.10)

文化審議会.2018. 『分かり合うための言語コミュニケーション』

● 多様化へのフラットな評価

—「打ち言葉」は、主にインターネットを介しキーを打つなどして伝え合う、かつてはなかった新しいコミュニケーションの形である。しかし、これらのやり取りも、互いに理解を深めていくための受け止め合いであることに変わりはない。(p.5)

—一人は一人一人異なった存在である。自分と相手との異なりを十分に意識し、互いにその異なりを乗り越えて歩み寄らなければ、分かり合うことにつながるコミュニケーションは実現しない。(p.5)

—同質性を前提とするのではなく、異なりや多様性に留意しながら伝え合う必要が生じている。(p.7)

文化審議会.2018.

『分かり合うための言語コミュニケーション』

● コミュニケーション＝「魔法」ではない＝「正解」はない

—近年繰り返し語られてきたコミュニケーションへの期待は、例えば、「コミュニケーション能力」の有無が話題にされたり、人を評価する際の観点のように用いられたりすることにつながってきた。一方でその期待が、それぞれの考えや気持ちを十分に伝え合うことを重視する方向へと社会を導いてきたかどうかを考えると、そうとは言い難い面もある。コミュニケーションやコミュニケーションに関する力は、様々な要素を含んだ複雑なものであって、いろいろな問題をたちどころに解決に導く「魔法」のように働くわけではない。
(p.3)

—コミュニケーションには、こうすれば必ずうまく行くというような「正解」はない。(p.6)

文化審議会.2018. 『分かり合うための言語コミュニケーション』

- コミュニケーション = 一人では成り立たない
- コミュニケーション = 様々なイメージがある

— 個々人の能力や技能が向上すれば円滑なコミュニケーションが達成されるというわけではない。コミュニケーションは複数の人間が参加して初めて成立するものであり、うまくいったかどうかを、単純に特定の個人が持つ能力や技能に帰することはできない。
(p.3)

— そもそもコミュニケーションという用語については、人によって意味や用法、抱いているイメージが異なる。(p.3)

文化審議会.2018. 『分かり合うための言語コミュニケーション』

●「コミュニケーション(能力)」偏重への注意喚起

—「**コミュニケーション能力**」への期待が高まる中で、適切に自己表現したいと感じながらも、否定や誤解をされたり、人間関係を損ねたりすることを恐れ、**自信を持って伸び伸びと伝え合うことができずにいる人が少なくない**。同時に、**きちんとした言葉遣いができないと社会から認めてもらえない**、と感じている人も多い。(p.8)

—知識や経験、理解力が十分ある人々など、**年長者や指導する立場にある人たちの伝え合いの在り方が問題にされることは少ない**。(p.9)

—10年以上連続して、企業が新卒者採用をする際に最も重視するのは「**コミュニケーション能力**」という調査結果が示されています。このことも、**コミュニケーションに対する若者世代の不安を一層かき立てる要因**となっているのかもしれませんが。(p.27)

文化審議会.2018.

『分かり合うための言語コミュニケーション』

- 望ましい「コミュニケーション」 = 他者との異なりを認め歩み寄る
= 対面での伝え合いを大切にする
= 言葉の重みを再認識する

— 他の方の考え方や気持ち、受け止め方は、自分と異なっているのが当然であることを踏まえ、それらを互いに推し測って歩み寄ることなくしては、考えや気持ちを言葉に表して伝え合う社会は実現しないであろう。(p.11)

— 直接会うことによって無用な誤解が避けられる、といった効果があることも理解しておきたい。(p.14)

— 不注意による言葉や言葉遣いの誤解を避けるようにしたい。また、重要な通知を受け取ったときや、人から大切な相談を受けたときなど、それらを見逃さないようにするとともに、そこに用いられている言葉の一つ一つをしっかりと受け止め、意味を取り違えることのないよう吟味したい。(p.14)

文化審議会.2018.

『分かり合うための言語コミュニケーション』

● 望ましい「コミュニケーション」= 「正確さ」「分かりやすさ」「ふさわしさ」「敬意と親しさ」

● 強調される不断の「努力」 ～×解決

— 分かり合うための**努力**を放棄するわけにはいかない(p.6)

— 自分とは異なる考えや意見が存在するということを認める**努力**(p.11)

— 自分自身の言葉や言葉遣いについては十分に気を配り、伝え合いのための力を身に付けるよう**努力**(p.12)

— 理解するための**努力**(p.29)

— これからの時代において、言葉によって分かり合おうとする**努力**がますます重要になる(p.58)

「コミュニケーション(能力)」観の変遷

★共通している「コミュニケーション(能力)」観

- コミュニケーション = 社会と強く連関している
- コミュニケーション = 社会変化に伴い変容しつつある
- コミュニケーション = 相互行為
- コミュニケーション = 言語が重要かつ基本的な要素

大前提として・・・

- コミュニケーション = 議論すべき重要なことから

「コミュニケーション(能力)」観の変遷

★2018に見られる大転換

●2000,2004,2007は社会変化（多様化・情報化）とコミュニケーションの変容に対して警戒し、「伝統的」な共同体や規範的な言語使用を称揚。

⇒2018は社会変化とコミュニケーションの変容に対して寛容。

～諦観かも？

「コミュニケーション(能力)」観の変遷

★2018に見られる大転換

- 2000,2004,2007は教育（特に国語教育）による解決。
- 2000,2004,2007は「円滑」が理想。
 - ⇒2018はコミュニケーション＝「魔法」ではない＝「正解」はない
 - ⇒2018は個々人の不断の努力 ～×解決。「分かり合う」。
- 「コミュニケーション能力」の定義は多様で困難
- 「コミュニケーション(能力)」偏重への注意喚起

「コミュニケーション(能力)」観の変遷

★2004における「コミュニケーション論的転回」

- 2004において、「コミュニケーション能力」という言葉、「社会問題の原因 = コミュニケーション能力」という認識が明確に登場。

- 同時に、脳科学への言及がされることで、当該能力に関する期待と圧力が助長？

⇒2007における学校教育での「体験」の提供によって、「コミュニケーション能力」の有無 = 評価の対象となり、さらに拍車が？

おわりに

- ・「コミュニケーション能力」低下という認識
- ・「コミュニケーション能力」偏重（期待と圧力）

⇒文科省・文化庁の認識が、これらの言説化 = 一般的な認識の形成を促してきたのでは？

⇒なぜ、これほどまでに「コミュニケーション（能力）」が重視されるのか

=なぜ、私たちは「コミュニケーション（能力）」について語ってしまうのか

=「コミュニケーション（能力）」の言説化

=「社会のコミュニケーション学化」

⇒こうした**教育行政言説の影響**があるのでは？

おわりに

★今後の課題

- より多角的で深い分析 ～テキストマイニング
- 「変遷」の幅を広げる ～さらに過去の言説（資料）へ
- なぜ、これほどまでに「コミュニケーション（能力）」が重視されるのか

⇒おおよそ、山竹（2011）のような説明になるだろうが、一足飛びの感も。

—いま、コミュニケーション能力が重要になり、「空虚な承認ゲーム」が蔓延しているのは、社会共通の価値観を基盤とした「社会の承認」が不確実なものとなり、コミュニケーションを介した「身近な人間の承認」の重要性が増しているからなのだ。

参考文献

平田オリザ. 2012.『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書

小山哲春. 2015.「メタ認知能力としてのコンピテンス涵養のためのコミュニケーション教育」『日本コミュニケーション研究』44-1, pp.17-26.

山竹伸二. 2011.『「認められたい」の正体—承認不安の時代』講談社現代新書

脇忠幸. 2016.「「コミュニケーション能力」の言説分析」第19回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会発表資料

脇忠幸. 2017.「「〈コミュカ - コミュ障〉の言説分析」第20回日本コミュニケーション学会中国四国支部大会発表資料

脇忠幸. 2018.「「コミュニケーション能力」言説の内実とその背景—新聞読者投稿欄をデータとして—」『福山大学人間文化学部紀要』18, pp.1-17.